

# 琉球大学学術リポジトリ

目的を持ち，努力する生徒を育てるキャリア教育の  
あり方：  
国語科における職場体験学習の事前事後学習を中心  
として

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 睦子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41614">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41614</a>



## 目的を持ち、努力する生徒を育てるキャリア教育のあり方

### —国語科における職場体験学習の事前事後学習を中心として—

中山睦子

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・那覇市立石田中学校

#### 1. はじめに

これからの社会は、少子高齢化、グローバル化や情報化がさらに進み、先を見通すことがますます難しくなると言われている。子ども達が将来、就くことになる職業の在り方についても、技術革新等の影響により大きく変化することになると予測されている。このような変動の激しいグローバル化の時代を生きる・生き抜く力を育てることが今日本の教育で求められてきている。

次期学習指導要領の総則には、よりキャリア教育の重きが置かれている。特別活動を中心とした小学校の学級活動においても、一人一人のキャリア形成と自己実現が新たに加わり、発達段階に応じたキャリア形成の積み重ねが重要となった。また、文部科学省（2015）の平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果によると、沖縄県の公立高校の中退者数は936人、中途退学率は1.8%となっている。その理由は進路変更が51.9%と大半を示している。それは高校へ進学することが自己の現在と未来を結びつける場としての意識が弱いといえるのではないか。このようなことから沖縄県の中学生の生きる力の育成に課題が大きいと考えられる。目先のことだけを考えるのではなく、先を見通し、学習に取り組む意欲ある生徒を育てることが重要だと捉える。これに関して、千葉・島袋（2009）は目的達成への統制感、それを支える手段（努力、能力、運、教師の援助）の保有感から構成されるCAMI尺度を用いて、沖縄県の中学生の生きる力と進路発達を検討している。その結果、「関わり合いの強い他者に囲まれた援助を受けながら努力し行動できる生徒は「生きる力」を育み「学力」をつけ望ましい「キャリア発達」をしている」と述べている。さらに千葉・島袋（2009）はキャリア教育を通して将来の職業的な目的を形成し、その下で学習に取り組み努力できる「意志型」の児童生徒を育成する必要があると述べている。ところで山田（2011）は「進路成熟度が職場体験満足度を媒介して進路関連効力感の変容に影響」があるとし、「職場体験が進路成熟度の低い中学生に対する有効な働きかけとなる」ことを指摘する。さらに興味深いのは、「第一希望の職場で体験できなかった生徒であっても進路関連効力感が向上する」という、新しい場所に出会うことによって変容が促されることを指摘していることである。つまり、このことは、何らかの実体験が、学ぶ意義や働く意義を理解することになっているといえる。従って、職場体験によって職業観や勤労観を形成することにもつながる可能性を示唆するものである。

キャリア教育とは、中央教育審議会答申（2010）によると「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す」と定義されている。具体的にはキャリア教育で身につけたい能力（基礎的・汎用的能力）は①人間関係形成・社会関係形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力である。人間関係や社会関係を広げ・深め、それを基に職業世界を理解しそれに関連する自己理解を深め、将来の人生設計を行いながら、その都度迫ってくる課題を解決していく子どもたちの「姿」が求められている。それが「生きる・生き抜く力」であるといえる。



## 2. テーマ設定の理由

学ぶことと社会とのつながりを理解し、自己の将来を見通しながら、社会的・職業的自立に向けて目的を持ち、努力する生徒を育てたい。そのため職場体験をどう設計するのかを軸に、テーマを設定した。

## 3. 研究目的

職場体験学習の事前事後学習を充実させることによって、基礎的・汎用的能力全体を高めることを目的とする。

## 4. 研究の方法

国語科の授業において、聞くこと・話すことの活動を通して職場体験学習の事前事後学習の充実を図る。また職場体験学習事前、直後、事後にアンケートを行うことで生徒の変容を検証する。その中でも、とりわけ基礎的・汎用的能力の低い生徒の変容を検証する。アンケートを実施することで、その都度、気になる生徒への手立てとして、個々に合ったキャリアカウンセリングを行うこととする。さらに職業観・勤労観につなげるために学級活動における進路学習を継続して行う。重要だと考えることは、職場体験を通して普段の学習や生活につなげていくことだと考える。

## 5. 研究の進め方

### (1) 研究内容

キャリア教育は、目の前の生徒の実態を把握し、育てたい生徒像を明確にし、学校・学年担当の先生方の共通理解が何よりも大切であると考えます。授業においては、国語の授業において特に、聞くこと・話すことを中心に行っていく。その他にも特活や道徳、総合等においても実践を進めていく。ここでは、中学2年生に実施される職場体験を中心に、研究を進めていくこととする。職場体験は学校だけでは行うことができません、地域の協力があってこそ成立する。地域には市立公民館があり、連携をより図っていくこととする。また職場体験の目的の共通確認を十分に行うことが重要だと考えている。そのように取り組むことで、職場体験が決してイベント的に実施するのではなく、学校での学びが社会につながる道筋を考えさせたい。それらに加えて職業人講話を実施しようと考えている。それはこの道のプロと呼べるさまざまな職業人の成功した生き方に限らず、挫折を克服した生き方の話と生徒を出会わせることを意味している。おそらく生徒たちは、日々の学習や部活動などの失敗や挫折の体験を持っている。それがどう乗り越えるかは容易ではないが、誰か大人との出会いとモデル化によって、乗り越えられる力も育むことができるのではないかと考える。しかし、多様な生徒がいることから、生徒の様子をしっかりと見て、気になる生徒には声をかけ、常に今、出来ることや見通しを立てて実行することなどを一緒に確認し、少しずつ取り組ませていきたい。常に生徒とのラポートを口頃から大切に、悩みに寄り添いながら、生徒の基礎的・汎用的能力を高めていくことをねらいとした研究とする。

### (2) 研究計画

#### ①身につけたい力の共有と可視化

職場体験学習の計画として、2学年主任を中心に、目の前の生徒の実態を把握し、どんな力を身に付けさせたいのかを、学年会などでしっかり話し合い共通理解をする。学校行事や職場体験を中心とし、身に付けさせたい力を記述した年間計画を立て、学年掲示板に掲示する。掲示することは可視化することであり、生徒と身に付けさせたい力の共通確認ができることになる。身に付けさせたい力は、生徒にも分かり易い文言にすることで、意識付けにもつながるといえる。



**②校種間の交流**

特に、事後学習の職場体験の発表を、小学校6年生対象にプレゼン発表を行うことは、校種間の連携につながり、キャリアの発達から捉えても相互に効果的だと捉える。

**③言語能力を重視**

どの教科においても言語能力を土台とすることから、国語科を中心としたカリキュラムを行う。国語の授業での「聞くこと・話すこと」を重視したい。事後の学習ではお礼状の書き方を丁寧に行う。また道田・土屋（2017）は「中学校国語科における現行学習指導要領と現行国語教科書を批判的思考という観点から検討した結果、資質・能力としての批判的思考力育成はある程度可能である」と述べている。そのことにより、教科書を通して問いの工夫等を行うことで、批判的思考力を育てることも目指したい。

**④道徳・総合的な学習の時間**

道徳においては社会参画や公共の精神を扱った教材を計画的に入れていく。また、総合的な学習の時間において、職場体験を3日間実施する。他にも事前のマナー講座としてプロの方の指導や講話を行う。特に挫折経験し克服した方の講話を多く聞かせることが大事であると考え。さらに、ICTの活用も充実させプレゼン発表を充実させたい。

**⑤学級活動**

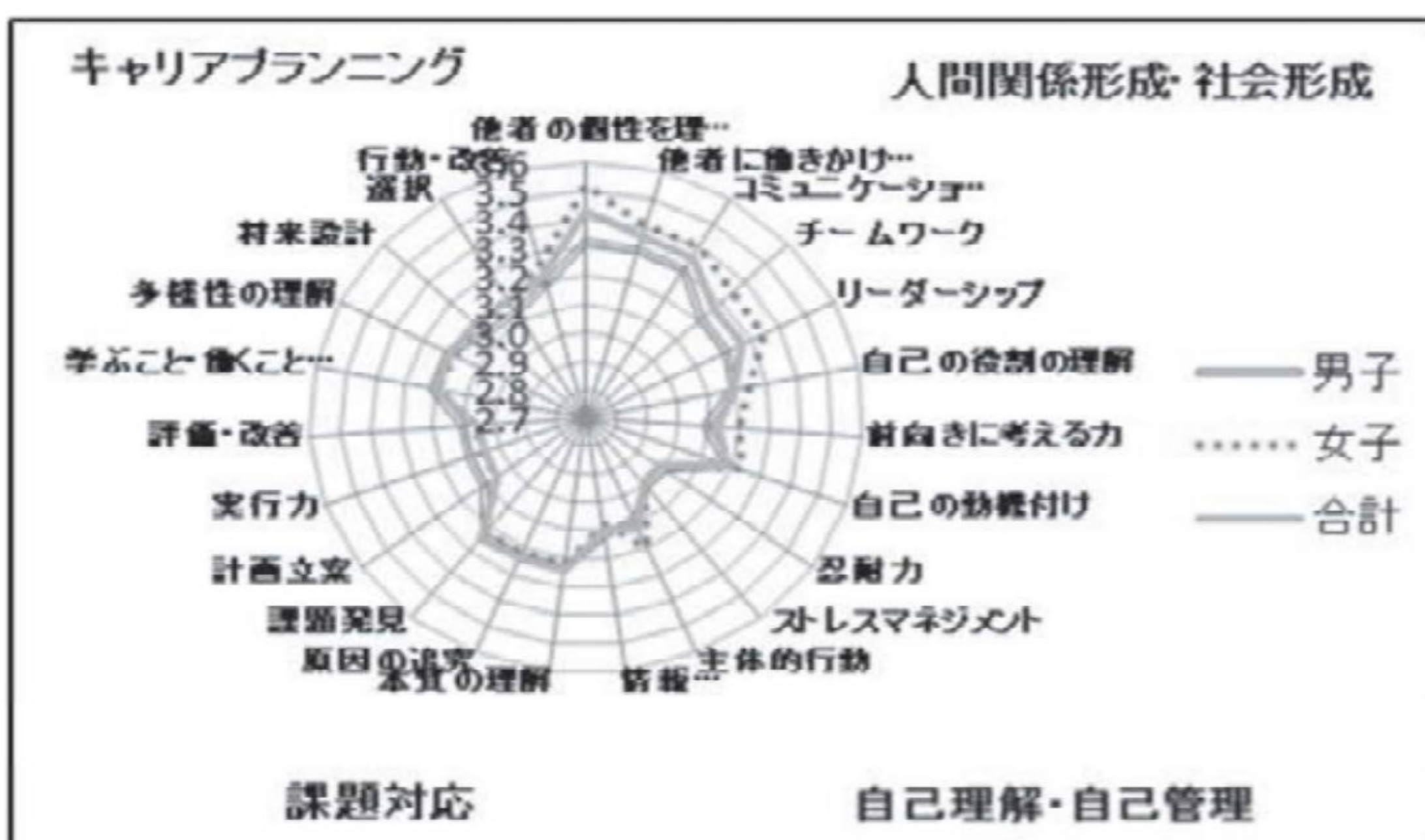
生徒も教師も振り返りをしっかりと行うことで、次に活かしていく視点が大事である。生徒の記述したワークシートはキャリアパスポートとして、学びの蓄積を残していく。また、職業観や勤労観へとつなげていくためには、進路学習も充実させる。学ぶ意義や働く意義など、学級での話し合い活動や問題解決学習などを行っていくことで、自分事として捉え、主体的な生徒に育つことを目指したい。そのためにも、より基底적であるといえる学級の居心地が良いと感じる風土づくりを大切にする。

**⑥地域発信と連携**

職場体験の様子を授業参観には掲示し、保護者に伝える。また市立公民館に掲示し、地域にも発信を行う。今まで職場体験学習以外にも、1年生の時に地域の方を講師におしごと先生や地域を知る学習などを行ってきた。しかし、それだけではなく教科の中で地域人材を活用すること、国語の授業においては、方言の学習で地域のお年寄りを講師に授業を行う。

**6. 基礎的・汎用的能力のアンケート**

以下のアンケート分析結果は、宮古島市内の中学校14校の結果である。



宮古島市内14校において基礎的・汎用的能力のアンケートを実施してもらった。(左記)学校全体の実態把握ができる。人間関係形成・社会形成能力は全体的に良い結果である。宮古島を訪れて地域の中の学校というイメージが強く学校と地域連携は強い。一方、忍耐力、ストレスマネジメントの項目が男女とも低い結果である。各学校、学年の実態に応じた取り組みが必要であると考え。

図1 基礎的・汎用的アンケート 合計1480名



## 6. 課題発見実習Ⅱ

### A校実習

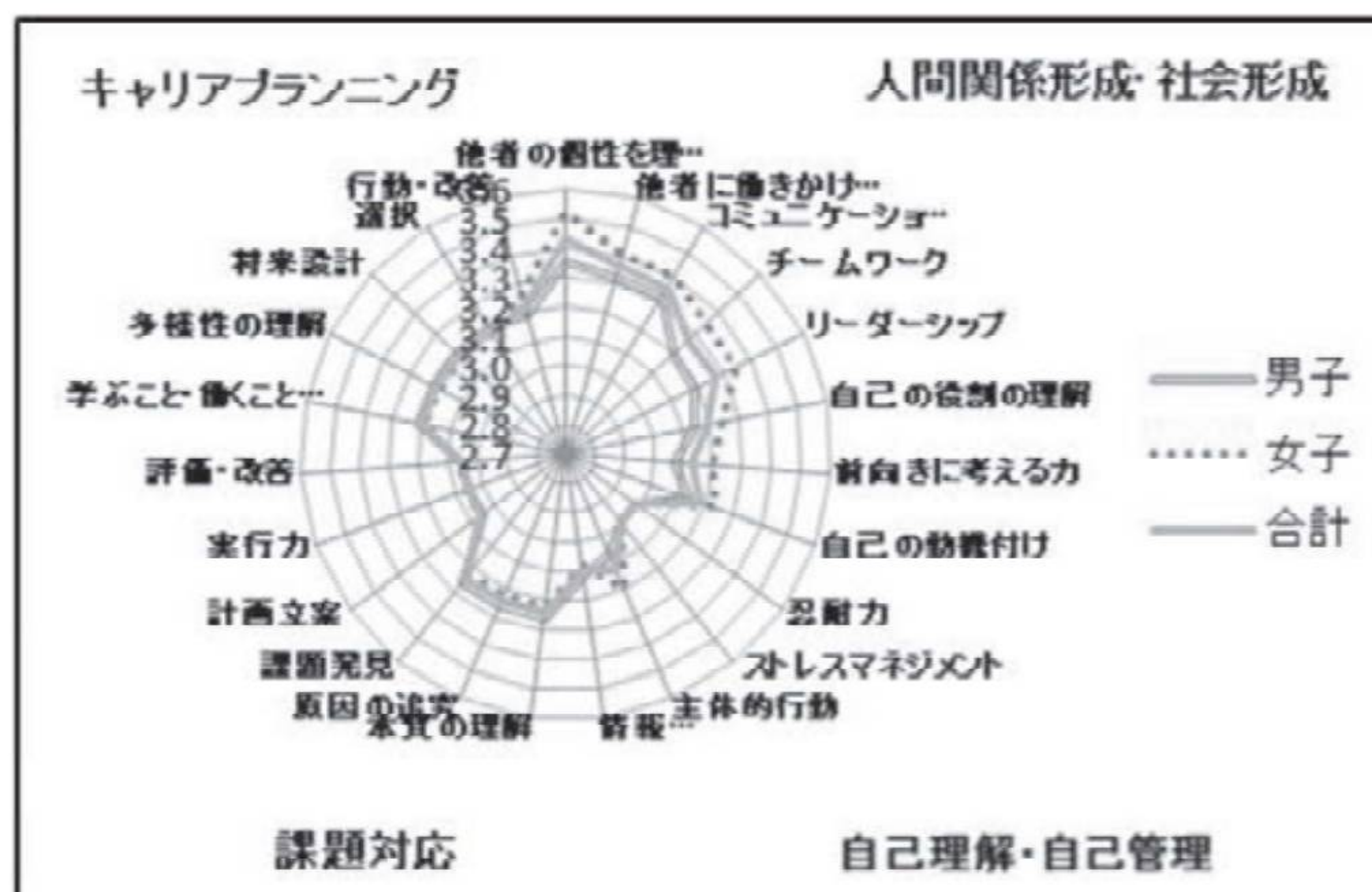


図2 A校基礎的・汎用的能力のアンケート合計780名

A校において基礎的・汎用的能力のアンケートを実施してもらった。(左記)次年度、勤務校でアンケートの実施分析を行う予定している。そのため、実習先でのアンケート分析も参考として実施した。A校においては、計画立案、実行力、評価・改善、忍耐力、ストレスマネジメントの項目が男女とも低い結果となった。日々の生活の中で、授業の中で、計画を立てて目標を持ち実行することを意識させたい。そのためには、振り返りを行うことが重要だと捉える。

### B校実習

1年生の読むことの領域、随想の教材で授業を行った。三角ロジックは論理的思考力を鍛える上で効果的であったといえる。社会で生きていく上で、言葉で伝える力は重要で、それは国語科で培う力であるといえる。また大半がT1での授業で、効果的なT2としての役目も学ぶことができた。

## 7. 成果と課題

基礎的・汎用的能力のアンケートの実施を2780名(宮古島14校、那覇地区1校、中頭地区1校)で取ることができた。共通した課題として忍耐力の弱さ、ストレスマネジメントの弱さが挙げられた。このアンケートは学校全体、学年全体の基礎的・汎用的能力の全体を見ることができ、課題を踏まえたキャリア教育のカリキュラムマネジメントの共通理解を図ることができると考える。A校での実習においては国語と特別活動で授業を行うことで、国語科の「話す・聞く力」の言語能力を育てることが特別活動での話し合いスキルにつながることを再認識することができた。またB校においては、論理的思考力を鍛える三角ロジックを扱った。今後は思考力や本文を解釈し自分の言葉で伝える力をつけさせたい。そして生きていく上で、自分を支える言葉の力を育てることを国語の授業を通して育てていきたい。

### [文献]

- 千葉康成・島袋恒男(2009), 中学生における「生きる力」の心理学的検討(1)CAMI理論を中心として  
琉球大学教育学部紀要, 75, 163-182, 8月
- 道田泰司・土屋善和(2017), 中学校国語科における現行学習指導要領下での批判的思考教育の可能性  
琉球大学教育学部紀要
- 文部科学省,(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm) (2018, 1, 30現在)
- 文部科学省,(2014)平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/09/1362012.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/1362012.htm) (2018, 1, 30現在)
- 山田智之(2011), 職場体験による中学生の進路成熟及び自立的高校進学動機の変容と影響要因  
日本キャリア教育学会